

目的 前報<sup>(1)</sup>ではS.11~61年卒の大阪在住・家政学部出身群の郵送アンケート回答者306名の、生活意識と生活条件(現況)について相関の有無を検べ、全体の傾向を知ると共に、条件相互、意識相互の関連性は多いが、条件と意識の関連は必ずしも多くないと報じた。今回は同一大学の文・理学部出身者の年齢をほぼ揃えて各500名抽出し、同一アンケートへの対応を検べ、家政学部出身群と比較した。(注)日本家政学会関西支部才9回発表会要旨集)

方法 実施の時期は同一年度内の前回1987.4.1.付、今回は1987.10.1.付で発送。調査項目は前回24項目に6項目追加して計30項目を分析。集計・検定( $m \times n$ 分割 $\chi^2$ )・作図は全てパソコンを用いた。

- 結果 ①有効回収数は文265,理307,家306で、文学部の協力は有意に少なかった。
- ②30向中、学部間に有意の差を認められたのは、3)卒時職、14)出身執着、15)家庭経営と学部、16)家事の手抜き、と今回追加の22)同窓会員自覚、23)母校想い、24)大学クラス会、29)同窓会費納入、33)一般同窓生への関心、の9向であった。
- ③上記9向について学部別にみると、3)は文学部に特に「企業」が少なく、家政は「進学・家事」が多く3学部の特徴がみられた。14)は家政学部は「大学名」が多く「学部名」は少なかった。15)は文・理に「無記入」が多く、家政は「関係あり」が多かった。16)は家政のみに「早気」が少なかった。また33)は文に「否定」が多く、家政に「肯定」が多かったが、他の22),23),24),29)は家政のみに特徴がみられて「肯定」が文・理より多かった。
- ④学部間に有意差の認められなかった20項目については合計878回答を前報同様分析中。